

どうなってるの？辺野古の〈現場〉

辺野古新基地；「普天間代替施設」とされるが、実態は軍港機能を備えた巨大な軍事施設であり新たな基地負担の増大。知事選や県民投票で「辺野古反対」の民意は何度も示されてきたが、政府・防衛省は知事権限をなく奪する「代執行」までして埋め立て工事を強行。昨年1月からは大浦湾の埋め立てに着手した。軟弱地盤や活断層があり米軍内部からも完成を危ぶむ声が出ているが、莫大な国家予算を投じた新基地建設工事は続く。しかし各現場での粘り強い抵抗闘争で土砂投入はまだ全体の10数%に過ぎない。工事はまだ止められる！

安和棧橋：2024年6月のダンプによる死傷事故の原因も究明されないまま8月22日から土砂搬出を再開。沖縄防衛局は事業者責任に頬被りし、警備員を使って歩道を封鎖して市民の行動＝憲法で規定された「表現の自由」を不当にも規制。事故の責任も市民に押し付けようとしている。

キャンプシュワブ・新工事用ゲート：辺野古弾薬庫の手前にある新工事用ゲートでは、平日の9時、正午、15時の土砂等を積載した大型ダンプによる車両搬入時に市民が座り込み、歌声を響かせながら抗議する。搬入を一日3回に限定させているのは毎日駆け付ける市民がいるから。



本部・塩川港：2024年12月2日から、安和の事故以降中断していた土砂搬出作業再開。牛歩による抗議行動が続く(写真は本部町民提供)。



大浦湾：防衛局は「昨年末までに59000群体のサンゴ移植完了」と発表しているが、移植で再生するサンゴはわずかであり、埋め立てによる周辺サンゴへの影響ははかり知れない。現在、生物多様性豊かな海に、高さ約100mもある橋のついた巨大なサンドコンパクションパイルSCP船が6隻、浚渫船、海砂を軟弱地盤の海底に敷くトレミー船、起重機船など大小の作業船が密集。今年に入ってから油流出・火災・作業員の骨折等々、作業船の事故が続発。事業者・防衛局の管理責任が問われる事態となっている。軟弱地盤への海砂投下と砂ぐい打設、護岸に使用するケーソンを仮置きする海上ヤード設置、護岸建設などが進行中。連日、海上保安庁のゴムボートの強引な警備行動の中、ヘリ基地反対協・海上行動チームがカヌー、抗議船を繰り出し抗議行動を展開している。

宮城島：2024年11月から新たにうるま市の宮城島から辺野古に向けて土砂搬出が始まり、うるま市民が中心となり鉾山ゲート前で連日抗議行動を展開中(写真はうるま市島ぐるみ会議提供)。農道のダンプ台数規制(1日40台)を無視し、連日150台を超えるダンプが運行。3月からは設計変更申請と異なる短縮運行ルートを使用。県は運行停止と設計変更申請の再提出を求めているが、防衛局はこれを無視している。



作成：辺野古の海を土砂で埋めるな！首都圏連絡会(埋めるな連)
連絡：辺野古への基地建設を許さない実行委員会(090-3910-4140 沖縄・一坪反戦地主会関東ブロック)
平和を実現するキリスト者ネット(TEL&FAX03-3813-2885) 辺野古・高江を守ろう！NGOネットワーク(henokotakaengo@gmail.com) ★辺野古新基地の問題点は、埋めるな連ブログ参照 ➡

